

株式会社TriOrb × 国立大学法人九州工業大学

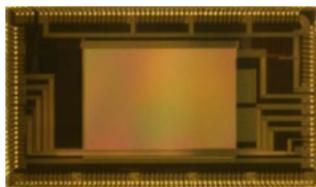
概要

TriOrb が持つ全方向移動モジュールと、九州工業大学が持つ変化に適応可能な超低消費電力エッジAI システムを統合した自律モジュールロボティクスの実装に向けたオープン & クローズ戦略の仮説を検証する。

コア技術

移動モジュール × 極省エネルギー脳型AI

- 車輪の制約を克服した自由で柔軟な移動技術を実現する移動モジュール TriOrb BASEと、九州工業大学が開発中の低消費電力かつ変化に適応可能な脳型AIチップを融合。
- 人と安全かつ柔軟に協働できる自律モジュールロボティクスにより、複雑・狭隘な現場での作業効率と安全性を向上し、中長期的には、用途やレイアウトに応じて再構成できる新しい生産システムの実現を目指す。



低消費電力・超高効率
レーザーチップ & SDK



[株式会社TriOrb \(トライオーブ\)](#)



(応用例)
TriOrb BASEとAIを組み合わせた
見守りロボ (SABOTICS)

検証内容

オープン & クローズ戦略 (仮説)

- モジュール間の接続を標準化してオープン領域とすることで他企業が自由に自社技術を組み合わせられる仕組みを構築する。これによりモジュール単位で柔軟に組み替え可能なプラットフォームを実現し市場を最大化。
- 移動モジュールの高度な制御技術や協調搬送に関する基本特許をクローズ領域として競争力を確保。



他企業



通信プロトコルなど



移動モジュール

◆オープン領域：

標準インターフェースや通信プロトコル

- 他社の参加
- 柔軟に組み替え可能なプラットフォームの実現

◆クローズ領域：

移動モジュールの高度な制御技術や協調搬送に関する基本特許

実証事業（1）：

企業・大学等の基盤的共同研究開発におけるオープン＆クローズ戦略策定実証事業

事業実施体制

- 研究開発初期段階からO&C境界を設計
- 実装・知財・標準化を並行推進

事業実施内容

- オープン＆クローズ戦略の策定を目的に実装/知財/標準化を並行して実証
- 「OPEN＝つなぐ最小共通（共通API/共通データ/標準IF）」と「CLOSE＝差別化コア（高度制御・協調搬送・AI等）」の境界を定義し、妥当性を評価

| 区分 | 組織 | 役割 | No. | テーマ | 実施内容 |
|------|------------|---|-----|-----------|--|
| 事業 | TriOrb | <ul style="list-style-type: none"> 移動モジュールの実装/製品化 市場検証/現場データ取得 差別化領域の明確化 | ① | 実装/運用実証 | 移動モジュール+AIの統合を前提に、現場適用の要件・制約を抽出（導入・再構成・安全・運用） |
| 大学 | 九州工業大学 | <ul style="list-style-type: none"> 脳型AIハードウェア研究 標準化設計/制度設計 O&C境界設計支援 | ② | 知財調査・設計 | 競合/周辺領域の特許・技術動向を整理し、CLOSE（守る領域）を具体化（基本特許+ノウハウ） |
| 専門機関 | セリオ国際特許事務所 | <ul style="list-style-type: none"> 欧州規格動向調査 ロボット技術動向調査 | ③ | 標準化・接続設計 | 国内外の標準/規格動向（VDA5050等）を踏まえ、OPEN（つなぐ領域）を共通API/共通データ/標準IFとして具体化 |
| | 産業技術総合研究所 | <ul style="list-style-type: none"> 自律移動ロボットのモジュール化に関する支援 ロボットモジュール標準化に関する技術的助言 | ④ | 合意形成・運営設計 | 参画条件、接続ルール、評価/認証、ガバナンス（WG運営）を整理し、普及（エコシステム化）へ接続 |
| | みらいリレーションズ | <ul style="list-style-type: none"> トランジションデザイン実施 | | | |

実証事業（1）：オープン＆クローズ戦略策定結果（全体像）

参加するインセンティブを明確にすることで、標準化・規格化を加速させる

【Plug & Play型ロボットエコシステム】

標準化・規格化



多様なロボットが組合せ自由に導入・交換・拡張しやすい市場をつくる

- ISO等の公式標準に加え、現場導入されやすい実装レベル仕様も参照
- 標準化テーマはユースケースと既存標準を確認した上で段階的に定める

OPEN

共通土台：相互運用を成立させ市場参加者を増やす 

- 機械/電気/通信インターフェース
- 接続ルール（接続・認識の前提）
- 共通API/データで“最低限動かせる”範囲の定義
 - ① 接続・認識（機器情報取得）
 - ② 基本動作（移動/簡易作業/最短シーケンス）
 - ③ 安全（停止・復帰の最小状態モデル）
 - ④ 状態監視（稼働・エラー等の基本ステータス）

CLOSE

保護：知財を中心に各社の差別化要素を守る 

- 競争優位に直結する移動/制御/AI等の領域を中心に、各社のコア技術/差別化要素を整理
 - 運用のノウハウ
 - 高度な制御技術
 - 学習アルゴリズム 等，

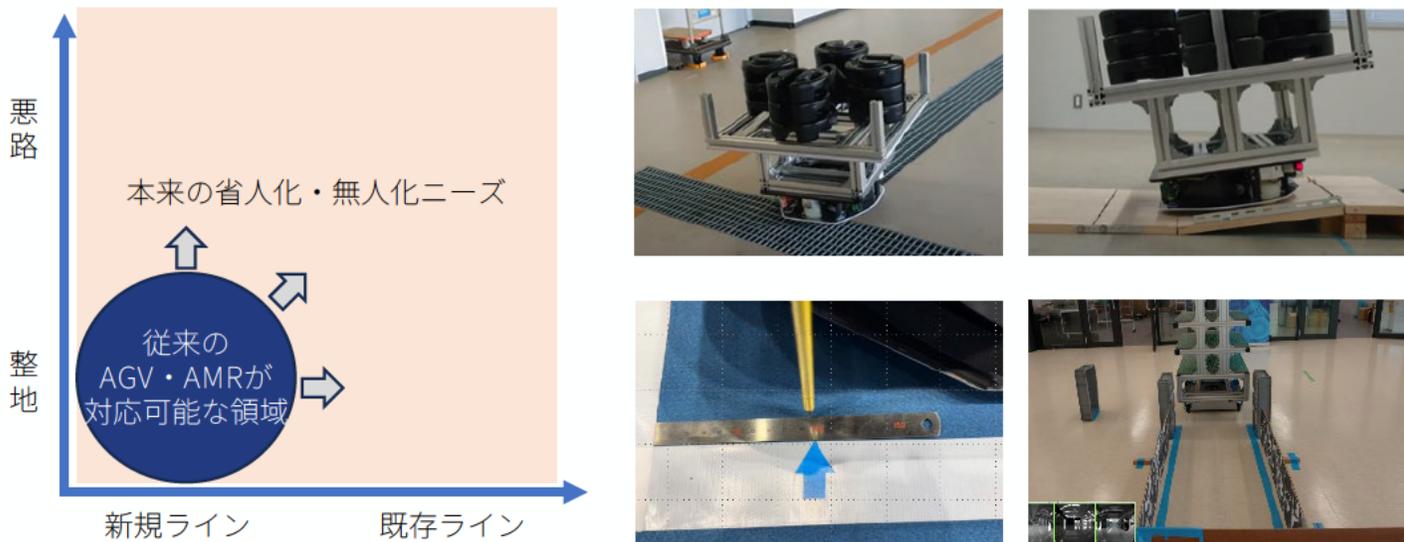
各社のユニークポイントを保護することにより
参画のデメリットを低減する

昨年度：オープン=IF公開/クローズ=コア技術（移動・制御・AI）という二層構造を整理

今年度：オープンを「共通API/共通データで最低限動作（+データ取り扱い枠組み）」へ具体化し、合意しやすい境界として提示

実証事業（1）：エコシステムにおいてユーザーがTriOrb×九工大を選択する理由（勝ち筋）

収益化方法（例 TriOrb）



<狙う領域>

- TriOrbが狙う領域は、従来のAGV・AMRが主に担ってきた領域とは異なる。既存のAGV・AMRの置き換えを目的とするのではなく、従来技術では適用が困難であった工程間搬送の実現を目指す。
- エコシステム形成により、ユーザー、特に中小企業へのロボット導入が進展することで、工程間搬送に関する課題が一層顕在化すると見込まれる。
- その結果、高い外乱走破性、高精度な停止位置精度、フレキシブルな搬送(単独・複数台搬送)という独自の特徴を有するTriOrbの適用可能性は、さらに広がると考えられる。

強みとなるコア技術／差別化要素

移動/制御

TriOrb



- 高い悪路走行性 (17%以下の上り・下り坂、高さ10 mm程度の段差など)
- 高速・高精度な位置決め (実証レベルで±2 mmの停止位置精度を実現)
- 協調搬送と重量可搬による重量・長尺物搬送 (1台で800 kg可搬。4台協調で最大3.2 tの搬送が可能)

AI

国立大学法人
九州工業大学



- 安全かつ柔軟な移動判断 (高精度な位置制御と柔軟な経路判断)
- 意思疎通力(人の命令を理解して、自律的に行動可能)
- 低消費電力 (AIのチップ化により、処理コストを下げ、長時間の稼働を実現。)

実証事業（1）：本事業によって得られたノウハウ・知見・課題

市場分析～ビジネスモデル検討

該当フェーズ フェーズⅠ／Ⅱ

論点/課題 オープン/クローズ境界の設計粒度

<得られた知見>

① オープンは「IF公開」だけでは成立せず、相互運用に必要な最小の共通動作＋共通データまで定義して初めて合意形成が進む。

理由：対象範囲の解釈が人・組織でズレやすく、境界が曖昧だと「どこを共通化するか」が決まらず議論が止まりやすい。

工夫：共通化対象を機能ブロックで分割し、まず相互運用に直結する最小セットに限定して整理した。

② クローズは単一要素では弱く、AI×移動×協調など運用価値に直結する統合機能として守ると差別化が明確になる。

理由：移動ロボ領域は要素技術が多岐で、単一要素では競争軸が分散しやすい。

工夫：クローズ候補を「高度制御／協調」「コア技術」「ノウハウ・基本特許」などレイヤーで整理し、説明軸を固定した。

③ 市場ニーズ分析と知財調査を同時に回すと、守るべきクローズとオープンにできる範囲の輪郭が早く固まる。

理由：市場の競争状況と権利の強み・空白を別々に見ると勝ち筋の定義が遅れる。

工夫：同一の機能ブロック枠組みで、競争状況と権利を対応付け（マッピング）して可視化した。

<課題>

- 標準化動向／知財／市場要求を同時に扱うための「線引き判断プロセス（最小セット→段階拡張）」の確立
- 将来の市場構造が不確実な中での、オープン/クローズの時間軸設計（普及前提のオープンと価値回収のクローズの接続）

オープン/クローズの設計

OPEN（つなぐ）

境界を先に設計

→ 実証で妥当性検証

 共通API

 共通データ（最小限）

 標準IF／通信PF

CLOSE（差別化）

市場形成(OPEN) → 普及（エコシステム）

→ 価値回収(CLOSE)

 高度制御／協調搬送

 AI（コア）

 基本特許＋ノウハウ

実証事業（1）：本事業によって得られたノウハウ・知見・課題

O&C具体化・推進体制構築

該当フェーズ フェーズⅢ

論点/課題 合意形成可能なO&C設計と推進体制

<得られた知見>

① オープンは「最低限の共通動作（相互運用の最小要件）」に限定すると参画インセンティブが成立しやすい。

理由：共通化範囲が広いほど各社の差別化領域が侵食され、合意形成が難航しやすい。

工夫：対象を「カテゴリ×レベル（部品／構成／システム等）」で分解し、まず参画しやすいセル（最小共通）に絞る方針とした。

② クローズは技術単体ではなく、「基本特許＋ノウハウ＋運用知見」のレイヤー構造で防衛すると実効性が高い。

理由：移動ロボ領域は実装・運用差が価値になりやすく、技術単体の説明では差別化が伝わりにくい。

工夫：クローズを「コア技術」だけでなく、運用価値に直結する統合機能と、その裏付けとなる知財・ノウハウとして整理した。

③ 標準化の推進には“中立ハブ”が有効で、大学等がハブになると企業間合意が円滑化しやすい。

理由：企業単独主導は利害が衝突しやすく、参画判断の心理的障壁が上がる。

工夫：研究／事業／知財の視点差を構造的に整理（役割分担・評価軸）し、「市場形成（オープン）→価値回収（クローズ）」の論理を明文化した。

<課題>

- ・ エコシステム拡大時のガバナンス設計（最小共通の維持と段階拡張ルール）
- ・ 国際標準化との実装レベル接続（ISO等の時間軸とデファクト仕様の使い分け）
- ・ 標準化プロセスと事業スピードの整合

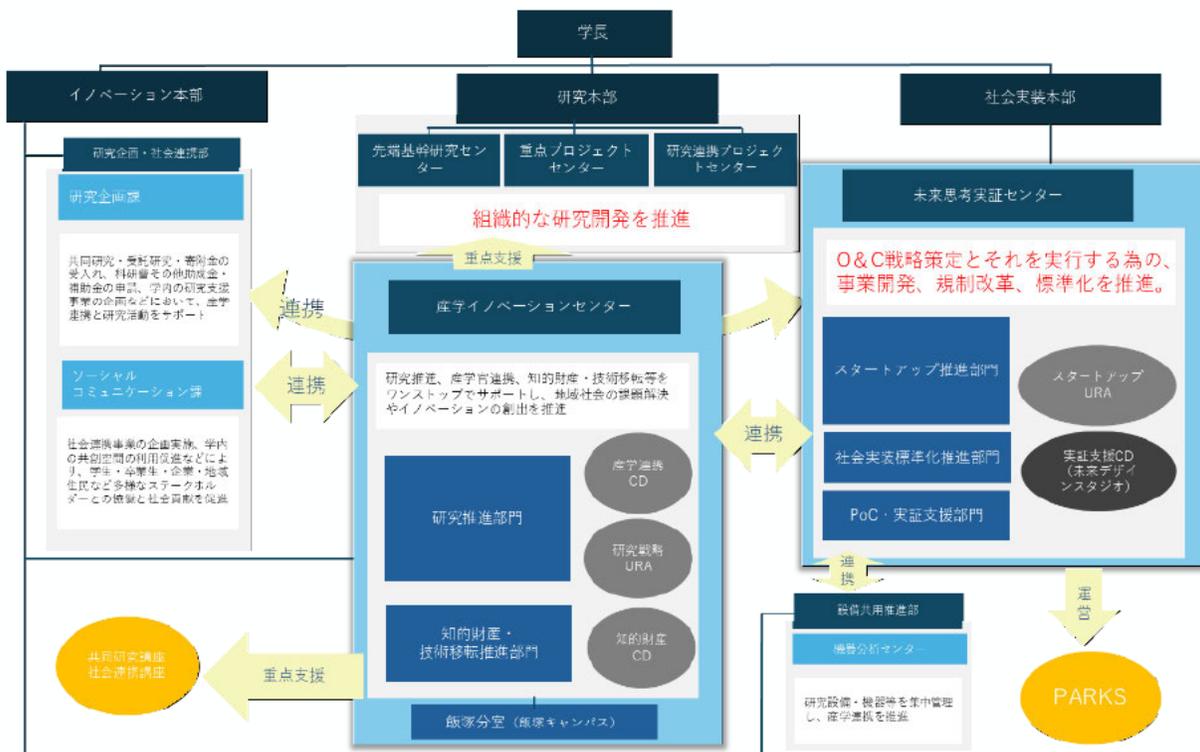
大学がハブとなり標準化を促進



実証事業（2）大学等におけるオープン＆クローズ戦略策定の推進体制

事業実施体制

- 科学とビジネスの近接化時代に対応しうるマネジメント体制の整備。
- 社会実装までを見据えた研究開発マネジメントと学術研究者の研究時間の確保を確保するための分業・連動モデルの構築。



事業実施内容

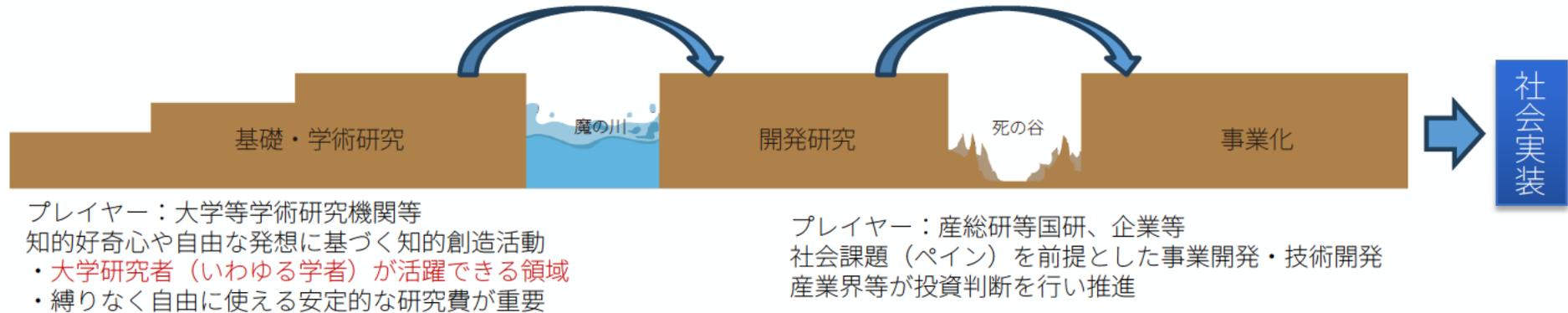
- オープン＆クローズ戦略策定のための人・スキル・ノウハウを定着させるための体制整備、セミナー等の実施。

| No. | テーマ | 実施内容 |
|-----|-------------------------------|---|
| ① | オープン＆クローズ戦略に関するセミナー | 研究成果の市場化に向けた産学連携の推進や標準化・知財活用に係る意識を涵養する。 |
| ② | 大学等のオープン＆クローズ戦略推進に係る体制整備 | オープン＆クローズ戦略策定を推進するスタッフやセミナー等教育活動を推進可能なスタッフ等を配置。 |
| ③ | オープン＆クローズ戦略策定に関連する人材育成プログラム策定 | 「標準化・オープン＆クローズ戦略基礎講座」のカリキュラム策定と講座の実施。 |
| ④ | オープン＆クローズ戦略策定に関連する取組みの公開 | 本事業で推進したオープン＆クローズ戦略策定に関する活動内容、体制整備について、セミナー等を活用し対外的に発表。 |

実証事業（2）本事業の実施結果

科学とビジネスの近接化自体における九州工業大学のオープン&クローズ戦略立案・実行・マネジメント体制

これまで：研究フェーズごとに研究開発マネジメントを実践



これから：科学創出と事業創出を連動させて推進



ディープテックを手段に目指すべき社会の実現を推進するアントレプレナーが必要

実証事業（2）本事業の実施結果

九州工業大学のオープン&クローズ戦略立案・実行・マネジメント体制

オープン&クローズ戦略をもとに社会実装まで一気に通貫でマネジメントする産学イノベーションセンターと魔の川・死の谷克服をミッションとする未来思考実証センターが連動して研究開発をマネジメントする体制を確立。

各TRLの内容

TRL9：安定供給

TRL8：スケール（パイロットライン）

TRL7：生産計画

TRL6：実証（システム）

TRL5：想定使用環境でのテスト

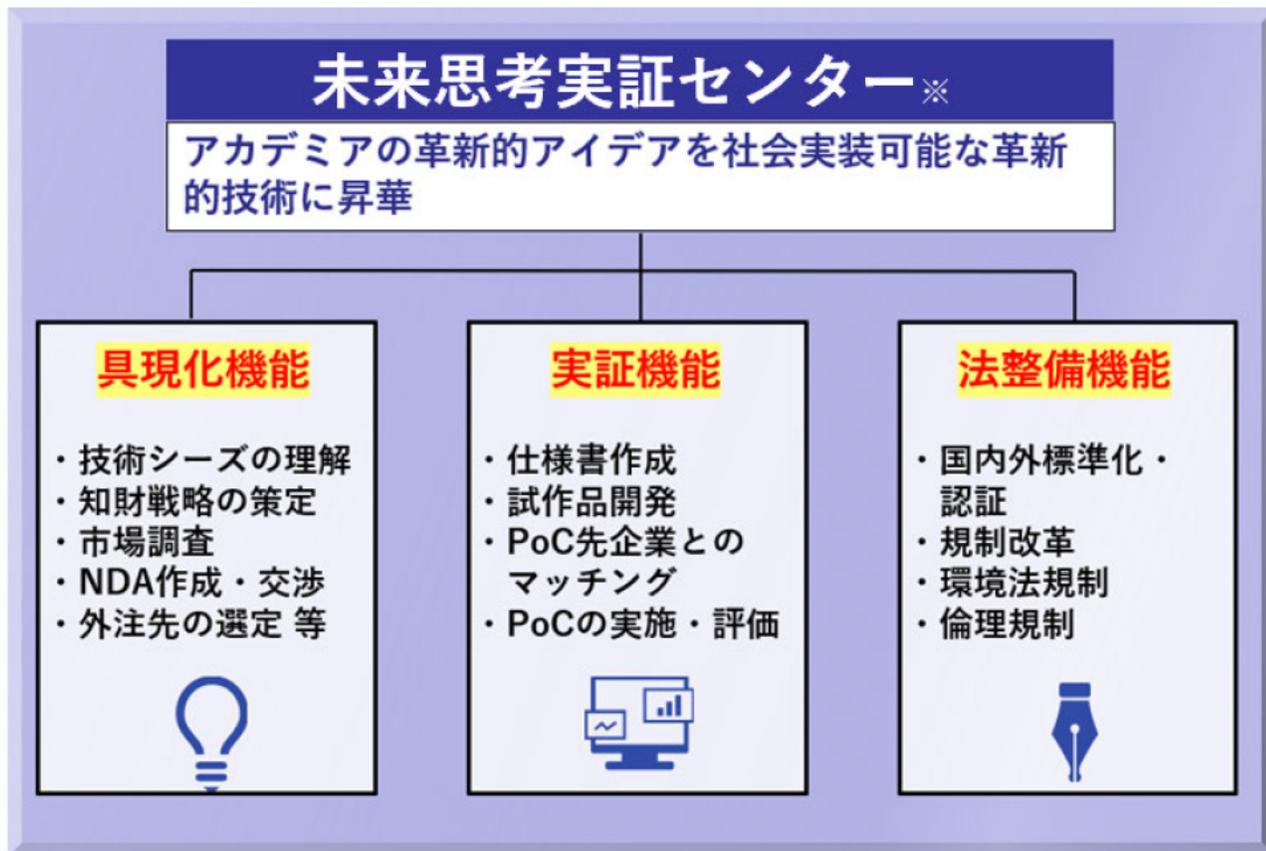
TRL4：研究室レベルでの初期テスト

TRL3：検証

TRL2：仮説

TRL1：基礎研究

産学イノベーションセンターが
一気に通貫のマネジメント



※文科省概算要求で設置

※TRL：Technology Readiness Level

実証事業（2）本事業の実施結果

オープン&クローズ戦略に関する基礎的知識の習得を通じた人材育成講座

- 標準化・知財活動の学内外への普及啓発や、オープン&クローズ戦略に関する基礎的知識の習得を通じた人材育成目的とした一連の講座を実施。
- 東京科学大学名誉教授田辺孝二氏および、東京科学大学特任教授古俣升雄氏に協力のもと一連の講座を実施。

九州工業大学 標準化・オープン&クローズ戦略基礎講座 日程表

| | 講義 | テーマ | 内容 | 時間・形式 | 担当講師 |
|--------------|---------|-----------------|-----------------------|------------------------|---|
| 1月13日 (火) | 受講ガイダンス | | 挨拶 基礎講座の説明 | 13:15~13:30 (対面) | 田辺孝二 東京科学大学名誉教授 |
| | ① 講義1 | 国際標準化・認証の重要性 | 標準化の基礎 | 13:30~15:00 (オンライン) | 和泉章 東京科学大学 アントレプレナーシップ教育機構 キャリア教育実施室 特任教授 |
| 1月14日 (水) | ② 講義2 | グローバルルール形成 | 日本発の抗菌コンセプト標準化 | 15:15~16:45 (対面) | 今井茂雄 元抗菌製品技術協議会(SIAA)会長 イントロン・スペース株式会社代表取締役 |
| | ③ 講義3 | グローバルルール形成 | クール宅急便グローバルエコシステム形成 | 13:30~15:00 (対面) | 梅津克彦 ヤマト運輸株式会社 エグゼクティブフェロー |
| 1月23日 (金) | ④ 講義4 | 企業の標準化戦略 | 事業競争力を高める標準化戦略 | 15:15~16:45 (オンライン) | 栗野晴夫 杉村萬国特許法律事務所 元ソニー株式会社 |
| | ⑤ 講義5 | 企業の標準化戦略 | 国際標準化による市場創生とグローバル展開 | 13:30~15:00 (オンライン) | 藤田俊弘 IDEC株式会社名誉顧問 |
| | ⑥ 講義6 | 標準化・オープン&クローズ戦略 | 標準化・オープン&クローズ戦略の理論と実践 | 15:15~16:45 (対面) | 田辺孝二 東京科学大学名誉教授 |

受講者の概要

基礎講座の受講者数は27名（2名の事務局職員を含む）であった。27名の属性は、役員・教員6名、職員17名（社会実装本部未来思考実証センター8名、産学イノベーションセンター3名、研究企画課1名、管理本部技術部3名、教育支援課1名、IoTネットワークイノベーション実証研究センター1名）、学生3名、外部機関-九州大学学生1名。なお、職員には、高度専門職員(URA)2名、研究職員3名を含む。



受講料無料

2025年度 標準化・オープン&クローズ戦略基礎講座

九州工業大学は、アカデミアから創出される革新的アイデアの社会実装を推進するため、2024年4月に社会実装本部未来思考実証センターを設置し、産学技術のオープン&クローズ戦略策定をはじめとするディープテックのルール整備等を進めております。

この度、産業競争力強化法に基づく特定新事業開拓事業活動計画の共同実施者の認定とともに、令和7年度経済産業省「基盤的共同研究開発に関するオープン&クローズ戦略策定の推進・体制整備強化に向けた実証調査事業」に採択されました。「標準化・オープン&クローズ戦略基礎講座」はこの実証調査事業の一環として昨年夏に引き続き実施するもので、標準化・知財活動の学内外への普及啓発や、オープン&クローズ戦略に関する基礎的知識の習得を目的としております。

本講座は2025年11月にオープンした未来テラスにて開催しますので、多数の申込みをお待ちしております。なお、本セミナーの実施にあたり、東京科学大学名誉教授田辺孝二氏および、東京科学大学特任教授古俣升雄氏に協力をいただきました。

日 程 2026年1月13日(火)、14日(水)、23日(金) 13:30~16:45 (初日のみ13:15)

受講方法 ハイブリッド形式(対面受講・オンライン受講:teams)

対 象 本学教職員、全学生
(社会実装や標準化、スタートアップに関心のある方にとって大変有意義な講座です。)

場 所 九州工業大学戸畑キャンパス 九工大未来テラス 1F未来ホール

申込方法 お申し込みは記載のQRコードよりお申込みください

コーディネーター 田辺 孝二 東京科学大学名誉教授

お申し込みはこちら
2025年度標準化・オープン&クローズ戦略基礎講座
標準化・オープン&クローズ戦略基礎講座
申し込みQRコード

| 日 | 時間 | テーマ | 内容 | 担当講師 |
|------------------------------|-------------|-------------------|-----------------------|--|
| 1日目 2026年 1月13日 (火) | 13:15~13:30 | 受講ガイダンス | 挨拶 コース説明 | 田辺孝二 東京科学大学名誉教授 |
| | 13:30~15:00 | 国際標準化・認証の重要性 | 標準化の基礎 | 和泉章 東京科学大学 アントレプレナーシップ教育機構 キャリア教育実施室 特任教授 |
| | 15:15~16:45 | グローバルルール形成(事例を基に) | 日本発の抗菌コンセプト標準化 | 今井茂雄 元抗菌製品技術協議会(SIAA)会長 イントロン・スペース株式会社代表取締役 |
| 2日目 2026年 1月14日 (水) | 13:30~15:00 | グローバルルール形成(事例を基に) | クール宅急便グローバルエコシステム形成 | 梅津克彦 ヤマト運輸株式会社 エグゼクティブフェロー |
| | 15:15~16:45 | 企業の標準化戦略 | 事業競争力を高める標準化戦略 | 栗野晴夫 杉村萬国特許法律事務所 元ソニー株式会社 |
| 3日目 2026年 1月23日 (金) | 13:30~15:00 | 企業の標準化戦略 | 国際標準化による市場創生とグローバル展開 | 藤田俊弘 IDEC株式会社名誉顧問 |
| | 15:15~16:45 | 標準化・オープン&クローズ戦略 | 標準化・オープン&クローズ戦略の理論と実践 | 田辺孝二 東京科学大学名誉教授 |

実証事業（2）本事業の実施結果

OCEANプロジェクトの総括セミナーを開催

- 本セミナーは、企業、行政、大学、研究機関等を対象として、最新の基準認証政策やOCEANプロジェクト（特定新需要開拓事業活動計画認定制度等）に関する講演、標準化・オープン＆クローズ戦略や標準化活動の具体的な取り組み事例などを紹介。企業や大学の研究開発成果の社会実装・市場化の参考となる情報提供、意識の醸成を行った。
- 連携機関の講演を盛り込むことでオープン＆クローズ戦略推進エコシステムの可視化も目指す。

オープン＆クローズ戦略セミナーの概要

日時：2026年2月18日（水）13:30～17:00

場所：リーガロイヤルホテル小倉 エンパイアルーム（3F）

参加者：企業、行政、大学、研究機関、支援機関等97名（オンライン50人を含む）

プログラム

- 「新たな基準認証政策の展開ー日本型標準加速化モデル2025ーの実現に向けて」
経済産業省イノベーション・環境局国際標準課産業標準専門職 林 達郎氏
- OCEAN事業の取り組み紹介
株式会社TriOrb 最高研究責任者 富永雄一氏
株式会社野村総合研究所「冗長性を持ったロボット用エッジAI動向」
九州工業大学未来思考実証センター 副理事 米澤恵一朗
- 「Deep Techの社会実装を加速するトランジションデザイン」
東京科学大学環境・社会理工学院 准教授 大橋 匠氏
- 「標準化を使ったビジネス戦略と“新市場創造型標準化制度“」
一般財団法人日本規格協会標準化アドバイザー 斎藤春洋氏
- 新市場創造型標準化制度の活用事例紹介
「『KIKKONET』の標準化活動について」
粕谷製網株式会社 製品開発室長 深堀一夫氏



参加費無料

オープン＆クローズ戦略セミナー

～研究開発成果の社会実装・市場化の推進に向けて～

標準化や知的財産によるルール形成競争は国際的に活発化しており、企業や大学は標準化と知的財産を一体的に活用し、研究開発成果の市場化の確度を高め、収益を向上させていくための戦略（オープン＆クローズ戦略）の構築・活用が求められています。

本セミナーでは経済産業省が実施するOCEANプロジェクト（特定新需要開拓事業活動計画認定制度等）に関する講演、標準化・オープン＆クローズ戦略や標準化活動の具体的な取り組み事例などを紹介します。企業や大学の研究開発成果の社会実装・市場化の参考にしていただければ幸いです。みなさまのご参加をお待ちしております。

開催日時 2026年 **2月18日（水）** 13:30～17:00（開場13:00）

| | |
|----|--|
| 会場 | リーガロイヤルホテル小倉 エンパイアルーム（3F）北九州市小倉北区浅野2丁目14-2 |
| 定員 | 100名程度（オンライン配信あり） |
| 対象 | 企業、行政、大学、研究機関、支援機関 |

プログラム

13:30 開会挨拶 九州工業大学

13:35 基調講演
「新たな基準認証政策の展開ー日本型標準加速化モデル2025ーの実現に向けて」
経済産業省イノベーション・環境局国際標準課産業標準専門職 林 達郎氏

14:05 OCEAN事業の取り組み紹介
株式会社TriOrb 最高研究責任者 富永雄一氏
株式会社野村総合研究所「冗長性を持ったロボット用エッジAI動向について」
九州工業大学未来思考実証センター 副理事 米澤恵一朗
～休憩～（10分）

15:25 「Deep Techの社会実装を加速するトランジションデザイン」
東京科学大学環境・社会理工学院 准教授 大橋 匠氏

15:45 「標準化を使ったビジネス戦略と“新市場創造型標準化制度“」
一般財団法人日本規格協会 標準化アドバイザー 斎藤春洋氏

16:00 新市場創造型標準化制度の活用事例紹介
「『KIKKONET』の標準化活動について」
粕谷製網株式会社 製品開発室長 深堀一夫氏

16:45 一般財団法人九州オープンイノベーションセンターの事業紹介

16:55 閉会挨拶 一般財団法人九州オープンイノベーションセンター

参加申込 申込フォームはこちら

主催：国立大学法人九州工業大学 一般財団法人九州オープンイノベーションセンター
（本セミナーは経済産業省の委託事業の一環として実施）
協力：株式会社TriOrb
問合せ先：国立大学法人九州工業大学 社会実装本部未来思考実証センター
TEL 093-884-3485 <https://forms.office.com/r/kwXTV6b3k>



実証事業（2）本事業によって得られたノウハウ・知見・課題

理解・意識の変化創出、普及啓発の設計

課題

- オープン＆クローズ戦略そのものの理解・必要性が組織内で浸透していなかった。

- 個を中心に推進する知的好奇心探究活動を社会実装するには、組織としての研究経営戦略とPJのオープン＆クローズ戦略が連動する体制・仕組みを構築することが重要との認識のもと、有機的な活動を全学的に創発しやすい環境を整備。
- 学術にエフォートを割くべき教員の時間をしっかり確保できるように、社会実装活動、特に大学発スタートアップ創出をミッションとする事業創出人材を十名以上雇用することで、大学として社会実装推進の意思を明確にした。
- 大学の研究力強化、財務強化の観点から理屈をつけづらい大学発スタートアップ支援等において、大学発スタートアップの成長が大学の財務強化（新株予約権等による財務強化）につながる仕組みを整備することで、大学発スタートアップ成長支援と大学の財務強化に因果関係を構築。
- 学内のステークホルダーごとに主語を変えた戦略・仕組の可視化を心掛けた。これまでは、基礎・学術研究フェーズ、開発研究フェーズ、事業化フェーズそれぞれでプロジェクトを立て推進していればよかったが、科学とビジネスの近接化時代においては、これら全体を連動させたマネジメントが必要不可欠となる。それぞれのフェーズにおけるボトルネック、マイルストーンを可視化し、それぞれの連動性をいかに高めるかについて九工大型URAがマネジメントを実施。



科学起点、ビジネス起点の両アプローチを接続させるためのロードマップ（オープン＆クローズ戦略）が必要



ディープテックを手段に目指すべき社会の実現を推進するアントレプレナーが必要

推進体制・役割分担

課題

- 推進する仕組み・意義の確立が組織内で行えていなかった。

- オープン＆クローズ戦略策定を知の創出を使命とする大学研究者の業務ではなく、大学の研究経営組織の業務と定義し、その実践を行うスタッフをしっかりと確保することが効果的と考えた。これにより、研究者サイドはむしろ本領域における業務量は徐々に削減させる方向である。
- 個々に自由な研究活動を推進する立場である研究者とそれらを組織的に社会実装までつなげる研究経営組織をそれぞれ整備することが、業務推進の点から重要である。また、後者の領域に興味を持つアカデミア人材も一定数いることが明らかとなり、学内における博士人材のキャリアパスが多様化する効果も出ている。
- 一方、研究者がこれらに積極的に関与したくなる仕掛けとして、知財創出や社会実装実現によるインセンティブを設計することで研究者自身にもメリットがあることを可視化。
- サイエンスを担う研究者とビジネス創出を担う事業プロデューサーそれぞれの活動をそれぞれ推進させつつ、連動させるために九工大型URAによるマネジメント体制を確立。研究者と事業プロデューサーを必ずしもチームとして活動させるのではなく、それぞれの活動が連動するように九工大型URAがマネジメントすることが特徴。

サイエンス



研究者
PJセンター、部局等に所属

ビジネス



事業プロデューサー
未来思考実証センターに所属



九工大型URA

基礎研究から社会実装までの一連を企画・運営可能な研究開発マネジメント人材